ヒトの意味認知能力解明のための言語理論的基礎研究

Preliminary Exploration of Cognition of Linguistic Meaning

仁科弘之（埼玉大学教養学部哲学人間システム講座・教授）

Hiroyuki Nishina (Faculty of Liberal Arts, Dept. of Philosophy & Human Systems)

１．研究組織

研究代表者：仁科弘之 （教養学部教授）

２．研究経過

２．１． 研究経過と成果の概要

申請者は、これまで、ヒトの認知様式を意味理解から解明することを目指した総合的研究を行ってきた。まず、身体動作をフレーム上の各関節の回転状態を記述する表示（回転式）で記述しそれらを論理モデルとみたてることにより、このモデル上で存在式の様相性を評価する枠組みを定式化した。これにより、評価により得られた様相存在式群を当該動作動詞の指示物から抽出された意味情報（一種の意味表示）であるとみなす仮説を導くことができた。

上記の枠組みの中で、次のテーマについて研究を進めた。

(1) 動作の回転による様相的記述の根底にある存在移動命題の認知的基盤を語彙意味論からさぐり、この枠組みが認知（言語）理論的に妥当であることを示した。語彙意味論の枠組みにより特定の運動動詞の意味を記述する際には、一般にその概念構造(CS)と空間構造(SS)に空間上の軌跡の記述を必要とする。そこに本枠組みの評価式を当てはめることを試み、様相評価式がその概念構造(SS)の代替を果たすことを指摘し、それらの認知的な整合性を示した。これによって本研究の認知科学における位置づけを示した[1]。

さらに、行為動詞の意味を別の角度から捉えるために頻度副詞の研究を開始した。

(2) 頻度副詞の量化構造をイベント意味論の枠組みで記述する試みを行った。頻度副詞が顕在的な他の時間副詞の時間を限定する場合と、その時間によって指示された下位イベント内で量化を表す場合とで両義的な例を指摘し、それらの量化構造を提案し、国際会議で報告した[2]。

２．２． 今後の展望

(1) 動作の連続的記述を関節間の統合的な連続的動作で記述するために、これまで動作データを静的な図版示していたが、最近コンピュータ制御の歩行模型キットが入手できるようになった。これを応用した実験の準備を行っている。

(2) えられた量化構造をイベント論理の表示に翻訳し、その認知的な意味をさぐる端緒を見つけることが次の課題である。

３．研究成果

１．Nishina, Hiroyuki: "The Modal-Logical Interpretation of the Causation of Bodily Actions", （邦訳題名：「身体動作使役の様相論理的解釈」）in Schalley, Andrea C.and Khlenzos, Drew (Eds.): *Mental States: Evolution, Function, Nature*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, to appear.

２．Ozawa, Tomoaki, H. Nishina, K. Yoshimoto & S. Sato: "A Study on Multiple Interpretations of Frequency Adverbs in Japanese", （邦訳題名：「 日本語頻度副詞の多重解釈研究」） *Proceedings of Paclic 19*, The Nineteenth Asia-Pacific Conference of Language, Information and Cognition, Sinica,Taipei, (CD-ROM), 全 8pp. 2005 年.